

小出恵理奈は1986年生まれ、2012年に多摩美術大学の修士課程を修了したばかりの新鋭である。在学中からグループ展、公募展に積極的に参加している。今回初個展である。

小出は今回、綿布にアクリルの作品を8点出展した。各作品には「夜の魚」「光合成」などタイトルが付けられているが、本人は至って総て抽象絵画であると主張する。

その理由を尋ねると、小出は二つの答を持っていた。「幼少の時に見た風景が印象的であった。」「それと等価の風景を現在探している。」

抽象絵画とはP・モンドリアンのように具体的な事項を加工/変形/省略する場合と、K・マレーヴィチのような非対称抽象・絶対抽象絵画を追求する場面と大きく分かれる。

小出はそのどちらでもない。描く行為そのものを問うアクション・ペインティングではないにも関わらず、V・ゴッホのような筆致はジェストを意識しているように感じる。

しかしジェストが持つ疾走感ではなく、むしろ丁寧に、綿密に絵具を重ねていく。小出がその過程に様々な想いを作品に盛り込んでいるからこそ、ジェストが存在するのだ。

失われた記憶を掘り起こすこと、ありもしない桃源郷を希求すること。それこそが人間が本来持つ思想であり、ここから想像力が莫大に広がっていくべきではないだろうか。

画廊主の吉岡まさみがブログで指摘している通り、確かに今日の作家で抽象絵画を探求している者は少ないと私も感じる。抽象は売れない。それだけのことなのだろう。

冷静に観察すれば花も手も異様な形をしているし、流れる風、零れる光は止まる術を知らない。印象派が重要視した「雰囲気」こそ絶対に具体的に描くことはできない。

小出の作品は趣味に留まらない。絵画が持つ本質に届こうとしている。小出は抽象でも具象でも絵画を描き続けなければならないのだ。そこで、過去は未来へ変容する。

